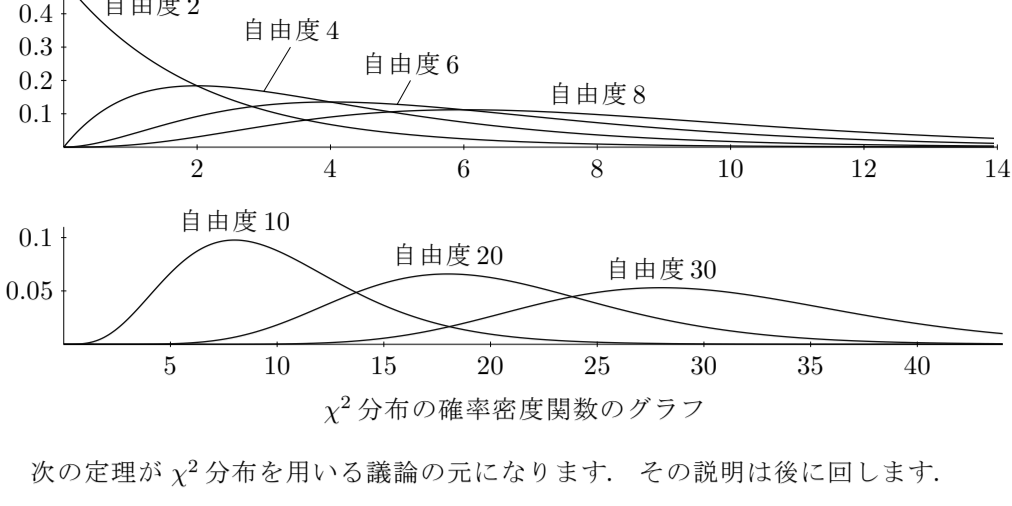


§9.1 χ^2 分布

正の自然数 n 及び標準正規分布 $N(0,1)$ に従う互いに独立な n 個の確率変数 $Z_1, Z_2, Z_3, \dots, Z_n$ に対して、確率変数

$$Z_1^2 + Z_2^2 + Z_3^2 + \dots + Z_n^2 = \sum_{k=1}^n Z_k^2$$

が従う確率分布を自由度 n の χ^2 分布 (カイ²乗分布) といいます。 χ^2 分布の確率密度関数の式は後にしてまずグラフを描きます。



次の定理が χ^2 分布を用いる議論の元になります。その説明は後に回します。

定理 9.1.1 2 以上の自然数 n に対して n 個の確率変数 $X_1, X_2, X_3, \dots, X_n$ は総て同じ正規分布に従い、互いに独立であるとする。それらの標準偏差を σ とおく。 $X_1, X_2, X_3, \dots, X_n$ の平均を表す確率変数 $\bar{X} = \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n X_k$ 及び偏差平方和を表す確率変数 $S = \sum_{k=1}^n (X_k - \bar{X})^2$ に対して、確率変数 $\frac{S}{\sigma^2}$ は自由度 $n-1$ の χ^2 分布に従う。

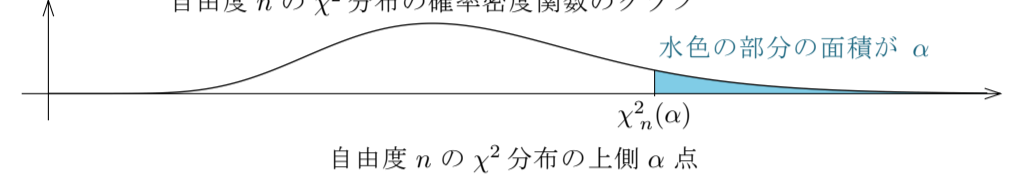
この定理を標本分布に適用します。母標準偏差が σ ($\sigma > 0$) である正規母集団から無作為抽出された大きさ n の標本の標本確率変数 $X_1, X_2, X_3, \dots, X_n$ は、総て同じ正規分布に従い、互いに独立で、それらの標準偏差は σ です。前述の定理より、標本確率変数 $X_1, X_2, X_3, \dots, X_n$ の平均を表す確率変数 $\bar{X} = \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n X_k$ 及び $X_1, X_2, X_3, \dots, X_n$ の偏差平方和を表す確率変数 $S = \sum_{k=1}^n (X_k - \bar{X})^2$ に対して、確率変数 $\frac{S}{\sigma^2}$ は自由度 $n-1$ の χ^2 分布に従います。

定理 9.1.2 母標準偏差が σ ($\sigma > 0$) である正規母集団から無作為抽出した大きさ n ($n \geq 2$) の正規標本の偏差平方和を表す確率変数を S とおくと、確率変数 $\frac{S}{\sigma^2}$ は自由度 $n-1$ の χ^2 分布に従う。

正の自然数 n に対して、確率変数 X は自由度 n の χ^2 分布に従うとします。証明は略しますが、 $0 < \alpha < 1$ である各実数 α に対して、 $P(X \geq k) = \alpha$ となる実数 k が唯一つ定まります。この実数 k を、自由度 n の χ^2 分布の上側 α 点といい、 $\chi_n^2(\alpha)$ と書き表します。つまり次のことが成り立ちます： $0 < \alpha < 1$ である各実数 α 及び各実数 a について、

$$P(X \geq a) = \alpha \iff a = \chi_n^2(\alpha)$$

χ^2 分布の確率密度関数のグラフを考えると次の図のようになります。



更に、 $0 < \alpha < 1$ である各実数 α 及び各実数 a について、

$$P(X \leq a) = \alpha \iff 1 - P(X \geq a) = \alpha \iff P(X \geq a) = 1 - \alpha$$

$$\iff a = \chi_n^2(1 - \alpha)$$

定理 9.1.3 確率変数 X は自由度 n の χ^2 分布に従うとする。 $0 < \alpha < 1$ である各実数 α 及び各実数 a について、

$$P(X \geq a) = \alpha \iff a = \chi_n^2(\alpha),$$

$$P(X \leq a) = \alpha \iff a = \chi_n^2(1 - \alpha)$$

正の自然数 n と実数 α ($0 \leq \alpha \leq 1$) とに対する自由度 n の χ^2 分布の上側 α 点 $\chi_n^2(\alpha)$ の値を表にしたものを χ^2 分布表といいます。

例題 9.1 母標準偏差が σ ($\sigma > 0$) である正規母集団から無作為に非復元抽出した大きさ 30 の正規標本の偏差平方和を表す確率変数 S に対して、確率変数 $\frac{S}{\sigma^2}$ を考える。

(1) $P\left(\frac{S}{\sigma^2} \geq a\right) = 5\%$ である実数 a を求める。

(2) $P\left(\frac{S}{\sigma^2} \leq b\right) = 1\%$ である実数 b を求める。

確率変数 $\frac{S}{\sigma^2}$ は自由度 29 の χ^2 分布に従う。

(1) $P\left(\frac{S}{\sigma^2} \geq a\right) = 0.05 \iff a = \chi_{29}^2(0.05) \doteq 42.56$

(2) $P\left(\frac{S}{\sigma^2} \leq b\right) = 0.01 \iff b = \chi_{29}^2(0.99) \doteq 14.26$ [終]

問題 9.1 母標準偏差が σ ($\sigma > 0$) である正規母集団から無作為に非復元抽出した大きさ 20 の正規標本の不偏分散を表す確率変数 U に対して、確率変数 $\frac{S}{\sigma^2}$ を考えます。

(1) $P\left(\frac{S}{\sigma^2} \geq a\right) = 1\%$ である実数 a を求めなさい。

(2) $P\left(\frac{S}{\sigma^2} \leq b\right) = 5\%$ である実数 b を求めなさい。

——— 定理の説明

定理 9.1.1 を説明します。 μ と σ とは定数で $\sigma > 0$ とします。2 以上の自然数 n に対して、 n 個の確率変数 $X_1, X_2, X_3, \dots, X_n$ は正規分布 $N(\mu, \sigma^2)$ に従い互いに独立であるとする。 n 以下の正の自然数 k に対して、 k 個の確率変数 $X_1, X_2, X_3, \dots, X_k$ の偏差平方和を表す確率変数を S_k とおきます：

$$S_k = \sum_{j=1}^k \left(X_j - \frac{1}{k} \sum_{i=1}^k X_i \right)^2 = \sum_{j=1}^k \left\{ X_j^2 - \frac{2X_j}{k} \sum_{i=1}^k X_i + \frac{1}{k^2} \left(\sum_{i=1}^k X_i \right)^2 \right\}$$

$$= \sum_{j=1}^k X_j^2 - \frac{2}{k} \sum_{j=1}^k X_j \sum_{i=1}^k X_i + \frac{1}{k^2} \sum_{j=1}^k \left(\sum_{i=1}^k X_i \right)^2$$

$$= \sum_{j=1}^k X_j^2 - \frac{2}{k} \left(\sum_{i=1}^k X_i \right)^2 + \frac{1}{k} \left(\sum_{i=1}^k X_i \right)^2$$

$$= \sum_{i=1}^k X_i^2 - \frac{1}{k} \left(\sum_{i=1}^k X_i \right)^2$$

$k \geq 2$ とします。

$$S_k - S_{k-1} = \sum_{i=1}^k X_i^2 - \frac{1}{k} \left(\sum_{i=1}^k X_i \right)^2 - \sum_{i=1}^{k-1} X_i^2 + \frac{1}{k-1} \left(\sum_{i=1}^{k-1} X_i \right)^2$$

$$= X_k^2 + \frac{1}{k-1} \left(\sum_{i=1}^{k-1} X_i \right)^2 - \frac{1}{k} \left(\sum_{i=1}^k X_i \right)^2$$

$$= X_k^2 + \frac{1}{k-1} \left(\sum_{i=1}^{k-1} X_i \right)^2 - \frac{1}{k} \left(\sum_{i=1}^{k-1} X_i + X_k \right)^2$$

$$= X_k^2 + \frac{1}{k-1} \left(\sum_{i=1}^{k-1} X_i \right)^2 - \frac{1}{k} \left\{ \left(\sum_{i=1}^{k-1} X_i \right)^2 + 2X_k \sum_{i=1}^{k-1} X_i + X_k^2 \right\}$$

$$= \frac{1}{k(k-1)} \left\{ \left(\sum_{i=1}^{k-1} X_i \right)^2 - 2(k-1)X_k \sum_{i=1}^{k-1} X_i + (k-1)^2 X_k^2 \right\}$$

$$= \frac{1}{k(k-1)} \left\{ \sum_{i=1}^{k-1} X_i - (k-1)X_k \right\}^2$$

$$= \left[\frac{1}{\sqrt{k(k-1)}} \left\{ \sum_{i=1}^{k-1} X_i - (k-1)X_k \right\} \right]^2$$

σ^2 で割ると

$$\frac{S_k}{\sigma^2} - \frac{S_{k-1}}{\sigma^2} = \left[\frac{1}{\sigma \sqrt{k(k-1)}} \left\{ \sum_{i=1}^{k-1} X_i - (k-1)X_k \right\} \right]^2$$

確率変数 Z_{k-1} を次のように定めます：

$$Z_{k-1} = \frac{1}{\sigma \sqrt{k(k-1)}} \left\{ \sum_{i=1}^{k-1} X_i - (k-1)X_k \right\}$$

このとき

$$\frac{S_k}{\sigma^2} - \frac{S_{k-1}}{\sigma^2} = Z_{k-1}^2$$

確率変数 $X_1, X_2, X_3, \dots, X_k$ は正規分布 $N(\mu, \sigma^2)$ に従い互いに独立なので、

$$E[Z_{k-1}] = E \left[\frac{1}{\sigma \sqrt{k(k-1)}} \left\{ \sum_{i=1}^{k-1} X_i - (k-1)X_k \right\} \right]$$

$$= \frac{1}{\sigma \sqrt{k(k-1)}} \left\{ \sum_{i=1}^{k-1} E[X_i] - (k-1)E[X_k] \right\}$$

$$= \frac{1}{\sigma \sqrt{k(k-1)}} \left\{ \sum_{i=1}^{k-1} \mu - (k-1)\mu \right\}$$

$$= 0,$$

$$V[Z_{k-1}] = V \left[\frac{1}{\sigma \sqrt{k(k-1)}} \left\{ \sum_{i=1}^{k-1} X_i - (k-1)X_k \right\} \right]$$

$$= \frac{1}{\sigma^2 k(k-1)} \left\{ \sum_{i=1}^{k-1} V[X_i] + (k-1)^2 V[X_k] \right\}$$

$$= \frac{1}{\sigma^2 k(k-1)} \left\{ \sum_{i=1}^{k-1} \sigma^2 + (k-1)^2 \sigma^2 \right\}$$

$$= \frac{1}{\sigma^2 k(k-1)} \{ \sigma^2(k-1) + \sigma^2(k-1)^2 \}$$

$$= 1.$$

定理 4.1.2 より Z_k は標準正規分布 $N(0,1)$ に従います。証明は略しますが確率変数 $Z_1, Z_2, Z_3, \dots, Z_{n-1}$ は互いに独立です。 $\frac{S_k}{\sigma^2} - \frac{S_{k-1}}{\sigma^2} = Z_{k-1}^2$ より、

$$\sum_{k=2}^n \left(\frac{S_k}{\sigma^2} - \frac{S_{k-1}}{\sigma^2} \right) = \sum_{k=2}^n Z_{k-1}^2,$$

$$\frac{S_2}{\sigma^2} - \frac{S_1}{\sigma^2} + \frac{S_3}{\sigma^2} - \frac{S_2}{\sigma^2} + \frac{S_4}{\sigma^2} - \frac{S_3}{\sigma^2} + \dots + \frac{S_n}{\sigma^2} - \frac{S_{n-1}}{\sigma^2} = Z_1^2 + Z_2^2 + Z_3^2 + \dots + Z_{n-1}^2,$$

$S_1 = 0$ なので

$$\frac{S_n}{\sigma^2} = \sum_{k=1}^{n-1} Z_k^2$$

故に確率変数 $\frac{S_n}{\sigma^2}$ は自由度 $n-1$ の χ^2 分布に従います。

——— χ^2 分布の確率密度関数

まず Γ 関数といわれる関数を準備します。区間 $(0, \infty)$ を定義域とする Γ 関数 $\Gamma(x)$ は次のように定義されます：

$$\Gamma(x) = \int_0^\infty e^{-t} t^{x-1} dt \quad (x > 0)$$

この Γ 関数 $\Gamma(x)$ について次の公式が成り立ちます：正の自然数 n に対して、

$$\Gamma(n) = (n-1)(n-2)(n-3)\dots 2 \cdot 1 = (n-1)!,$$

$$\Gamma\left(\frac{2n-1}{2}\right) = \frac{(2n-3)(2n-5)(2n-7)\dots 3 \cdot 1}{2^{n-1}} \sqrt{\pi}.$$

正の自然数 n に対して、自由度 n の χ^2 分布の確率密度関数 $f(x)$ は次のようになります：

$$f(x) = \begin{cases} \frac{x^{\frac{n}{2}-1}}{2^{\frac{n}{2}} \Gamma\left(\frac{n}{2}\right) e^{\frac{x}{2}}} & (x \geq 0 \text{ のとき}) \\ 0 & (x < 0 \text{ のとき}) \end{cases}$$

²⁾ χ はギリシャ文字で“カイ”と言います。